



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	土地利用型酪農経営における飼料作外部化の展開に関する研究：主体間関係の構造とマネジメントを中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	岡田, 直樹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	乙第6910号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56111
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Naoki_Okada_review.pdf, 審査の要旨



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

共生基盤学専攻 博士（農学）

氏名 岡 田 直 樹

審査担当者	主 査	教 授	柳 村 俊 介
	副 査	教 授	坂 下 明 彦
	副 査	講 師	東 山 寛

学 位 論 文 題 名

土地利用型酪農経営における飼料作外部化の展開に関する研究
—主体間関係の構造とマネジメントを中心に—

本論文は、本文 149 ページ（目次 4 ページを含む）、図表 150、参考・引用文献 170 からなり、和文で書かれている。他に参考論文 5 編（うち査読付き論文 3 編）が添えられている。

本論文の目的は、北海道で展開する土地利用型酪農経営の飼料作外部化を対象に、農業における分業化の論理を整序し、今後の展開方向を解明することにある。

1990 年代以降、北海道では飼料作外部化を伴う酪農生産体制が形成されるが、序章では、こうした体制が安定的ではないことに注目し、飼料作外部化を伴う酪農生産体制の持続安定化条件の解明という課題を設定する。こうした分業体制のもとでは酪農経営、受託主体双方にリスクが存在することから、主体間関係の枠組み、及び主体間関係のマネジメントのあり方に着目するという分析視角を提示する。

第 1 章では、1990 年以降の飼料作外部化の展開が整序され、①酪農経営とコントラクター間で飼料作作業受委託が行われるコントラクター体制、②機械利用組合に一元化された飼料作作業がさらにコントラクターに委託される三者間体制、③飼料生産・給与飼料製造工程が TMR センターに統合・外部化される TMR センター体制の三類型を抽出する。

第 2 章では、酪農経営の委託ニーズを解析し、①委託ニーズは多頭化実現のための構造再編手段に位置付くが、それにもかかわらず、②季節的な労働需要に対し、経営内での労働力確保ではなくより不安定な作業委託が志向され、このため③外部依存に伴うリスクマネジメントが求められることを指摘している。

第 3 章、第 4 章では、コントラクター体制の安定化条件を検討している。主体間での共通戦略の保有と協調行動によりコントラクターの展開条件を整えることが重要であり、こうした固定されたメンバー間でのゆるやかな組織化の枠組みを「組織的デザインインに基づくグループファーマーミング」として捉える。さらに、こうした体制形成の鍵は、体制を必要とする大規模経営のリーダーシップと、体制構築への資本支援にあるとする。

第 5 章では、2000 年代における濃厚飼料価格上昇等、営農条件悪化のもとでの三者間体制を検討し、持続安定性を示す事例では、機械利用組合における飼料生産工程の統合・一元化による生産効率向上や粗飼料品質向上の実現、さらには機械利用組合における資本蓄積と率先した作業体

制整備がなされていることを確認した。こうした体制構築は、この体制を必要とする大規模経営のリーダーシップによるとしている。

第6章、第7章では、TMRセンター体制の特質を検討し、この体制では、TMRセンターの持続安定化に向けて、TMR飼養への移行や多頭化促進など、酪農経営の飼養管理面での強いデザインインが求められることを確認する。ただし、飼養管理方式の転換や多頭化への適応力には経営間格差があり、適応困難な経営の存在が体制不安定化の原因となる恐れがある一方、体制の安定化は酪農経営の協調行動によるデザインインに依拠し、体制全体の管理機能が形成されていない問題を指摘している。

第8章、第9章では、北海道では数少ない、受委託の地域的調整組織の設立を伴った受委託体制について、道内事例とUKの事例を分析している。特にUKの事例では、受委託を調整するマシナリィリングが地域単位で設立され、専任マネジャーのもとで農業経営やコントラクター双方の情報が管理され、個々の委託ニーズや受託能力に応じた細やかな受委託を実現し、多様な農業経営の展開を可能としている。多数のコントラクターの存在と有能なマネジャーの存在がこうした体制成立の前提である。

終章は総括である。北海道における飼料作外部化を伴う酪農生産体制は、固定メンバー間でのグループファーマーリングとして展開し、大規模経営のリーダーシップと共通戦略形成へのデザインインの誘導によって主体間関係が調整されていた。コントラクター体制からTMRセンター体制に至る展開は、営農条件の悪化に対し飼料作の統合・外部化をより深化させる動きとして生じ、体制の安定化には酪農経営のより強いデザインインが必要となるが、デザインインに対応できない酪農経営の不安定化の回避や担い手の過度な減少を抑制することが課題となる。このため、デザインインのみに依拠せず、体制全体の包括的管理機能を形成し、UKの事例に見られるような柔軟な調整機能の発揮のもとで多様な酪農経営の展開条件を形成することが課題となるという結論が導き出される。

以上のように、本論文は、農業経営の外部委託の実態とその特徴を農業経営と受託組織との主体間関係として把握し、その論理を解明した。外部委託傾向は現代の農業経営に共通するものだが、本論文が示す知見は、北海道酪農にとどまらず、広い範囲の研究の基準となる普遍性を有している。よって、審査委員一同は、岡田直樹が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認定した。